

〔資料紹介〕

千葉市旦谷町北原遺跡発見の独鉛石

小澤清男

はじめに

ここに紹介する独鉛石は、昭和53年の春、千葉市旦谷町在住の石橋義雄氏が旦谷町北原 431番地先の畠を耕作中に発見し、加曾利貝塚博物館に寄贈した資料である。この独鉛石は、加曾利貝塚出土の独鉛石とは形態及び整形法などが異なり、かねてから注意していた遺物の一つであった。そこで、この独鉛石が加曾利貝塚出土の独鉛石や縄文時代後・晩期の様相を考えていく上で重要な遺物の一つであると思われる所以今回資料紹介し、併せて千葉県下という限られた地域ではあるが出土例を概観し、独鉛石の機能・役割について少し考えてみることにした。

独鉛石という呼称は、形態が仏具の独鉛に似ているところから付けられたもので、他に神代石や誕生石・石鉛・雷鉛などの呼称も見られる。また、両端部に磨製石斧のような刃部があるところから両頭石斧ともいわれており、主に縄文時代後・晩期に東日本を中心に分布し、弥生時代まで出土する遺物である。本来、この遺物の機能・役割は仏具の独鉛とは全く関係なく、道具の機能・役割が呼称と一致しない遺物の一つである。報告によれば、「独鉛状石器」(渡辺 1961) や「独鉛形石器」(米田他 1977) 「独鉛状石製品」(米田 1981) としているものもあるが、ここでは從来から広く慣用として使われている「独鉛石」を用いた。

1 北原遺跡

独鉛石が発見された千葉市旦谷町北原遺跡は、印旛沼へ流れ込む鹿島川によって樹枝状に開析された小支谷である吉岡支谷に面し、四街道市吉岡方向から佐倉市内田付近で鹿島川本流と合流する並木川の右岸、標高約20~25mの舌状台地先端部に位置する(第1図)。現在ここは畑地になっており、縄文時代後期中葉加曾利B式土器を主体に後期から晩期にかけての土器片が散布している。北原遺跡の位置する吉岡支谷は、現在千葉市・佐倉市・四街道市の3市におよび、これからここに紹介する独鉛石や北原遺跡について考えていく上で、特に周辺地域の縄文時代後・晩期の遺跡についても概観しておく必要があろう。

まず、縄文時代後期では対岸に加曾利B式期の佐倉市坂戸木戸場遺跡、坂戸念仏場東遺跡、坂戸尾牛遺跡、坂戸菊丹戸遺跡の4遺跡がある。縄文時代晩期では姥山I式期の四街道市六反歩遺跡や姥山II式期から前浦式期の佐倉市坂戸念仏場西遺跡の2遺跡があり(四街道市 1982、佐倉市

1984)、周辺地域に縄文時代後期から晩期にわたる遺跡が群集している様子がうかがえる。

このような周辺地域の様相からみて、独鉛石が発見された北原遺跡も鹿島川流域の小支谷に面した縄文時代後期から晩期にわたる遺跡群の中に包括される貴重な遺跡の一つと思われる。

2 北原遺跡発見の独鉛石（第2図）

この資料は、耕作による傷が一部見られるものの完形品である。形態は、体部中央に括が全周し括の両線に帯状隆起がめぐり、両端部は磨製石斧の刃部に似るという形態上の特異性を呈している。断面は、括部、帯状隆起とも橋円形であるが、両端部はやや偏平である。そして、帯状隆起から先端に行くにしたがい先細になるが、刃部は磨製石斧のような鋒さはなくむしろぼてっとした鈍い感じで、とても物を切ったり削ったりというような実用利器とは考えられない。

計測値は、全長 187cm、中央括部の最大値 3.9cm、最小値 3.2cm、帯状隆起の最大値 5.3cm、最小値 4.4cm、重量 4138g である。手に持った感じはかなりずっしりと重い。整形は、全面に粗い敲打を行った後、両先端部の一部に研磨を行っている。また、2条の帯状隆起の一部にも研磨痕が観察できた。器面は全体的にざらついている。その他、帯状隆起の頂部に数ヶ所打痕が認められる。石材は硬度の高い閃綠岩である。所属時期は、正確には不明であるが、表面採集した土器片からみておそらく縄文時代後半から晩期にかけてのものであろう。



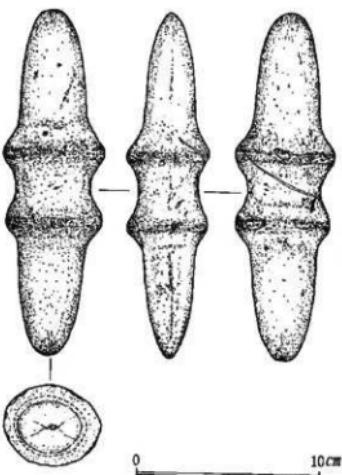
第1図 北原遺跡と周辺の縄文後・晩期の遺跡

- | | | | |
|---------------|---------|----------------|----------|
| 1. 千葉市旦谷町北原遺跡 | (縄文・後期) | 5. 佐倉市坂戸念佛寺東遺跡 | (縄文・後期) |
| 2. 四街道市六反歩遺跡 | (縄文・晩期) | 6. × 坂戸牛込牛遺跡 | (縄文・後期) |
| 3. 佐倉市坂戸木戸場遺跡 | (縄文・後期) | 7. × 坂戸菊丹戸遺跡 | (縄文・後期) |
| 4. × 坂戸念佛寺西遺跡 | (縄文・晩期) | 8. × 飯塚荒地台遺跡 | (縄文後~晩期) |

3 千葉県下出土の独鉛石

と独鉛状土製品

千葉県下における独鉛石出土数は、現在のところ26遺跡37例を数え、独鉛状土製品を加えると計27遺跡38例にのぼる（小澤 1985）。そのうち実測図で正式報告されているものは第3図に示した21例である。独鉛石の形態分類は、先学諸氏によって試みられている（大野 1909、米田 1981）のでここでは特に触れない。資料の割約はあるものの、道具の機能・役割を考えていく上で、その道具の破損の仕方について見ていくことは、使用痕などの観察とともに一つの有効な方法であると考えるので、独鉛石を破損の仕方によって幾つかに分類しながらその機能・役割の一端に触れてみたい。



第2図 北原遺跡発見の独鉛石実測図

1は三宅米吉氏が人類学雑誌に紹介した資料である。詳細は不明であるが、「……近頃千葉県下總國平山村ノ貝塚ヨリ得タル……」（三宅 1892）と記載しているところから、現在の千葉市平山町からの出土である。平山町に所在していて独鉛石を出土する可能性のある後・晩期の貝塚は、長谷部貝塚・築地台貝塚・台畠貝塚の3貝塚であるが、そのどれであるかは解らない。しかし、三宅氏によるこの千葉市平山町出土の独鉛石の報告が県下における独鉛石の最初の正式な報告であろう。2は印旛郡印西町天神台貝塚出土で（金子他 1961）、整形は敲打後研磨によって仕上げ、先端部に打痕が見られる。石材は花崗閃緑岩である。3・10は成田市殿台遺跡出土で（藤下他 1984）、3は敲打で仕上げられ中央括部から折れている。特記事項は、両端部の一部に丹塗の痕跡が認められることである。10は全面研磨によって仕上げられ、両端部は大きく破損し打痕が明瞭である。4・8は千葉市椎名崎遺跡の表採資料である（栗本他 1979）。4は端部の一方が破損し、8は両端部に打痕が認められる。5・6・7・13は市原市西広貝塚出土で5～7は硬砂岩製、13は石英安山岩製である（米田他 1977）。5は中央括部で折れ、6・7は大部分破損している。13は両端部に打痕が見られる。9は佐倉市吉見台遺跡出土で凝灰岩製である（近森他 1983）。11・12は千葉市築地台貝塚出土で（折原他 1978）、特に11は3号住居址から出土しており、住居址の時期が晩期初頭安行Ⅱa式期であることから独鉛石も当該期と思われる。全面に丁寧な研磨が行われ両先端部に打痕が見られる。現在のところ県下の遺構内

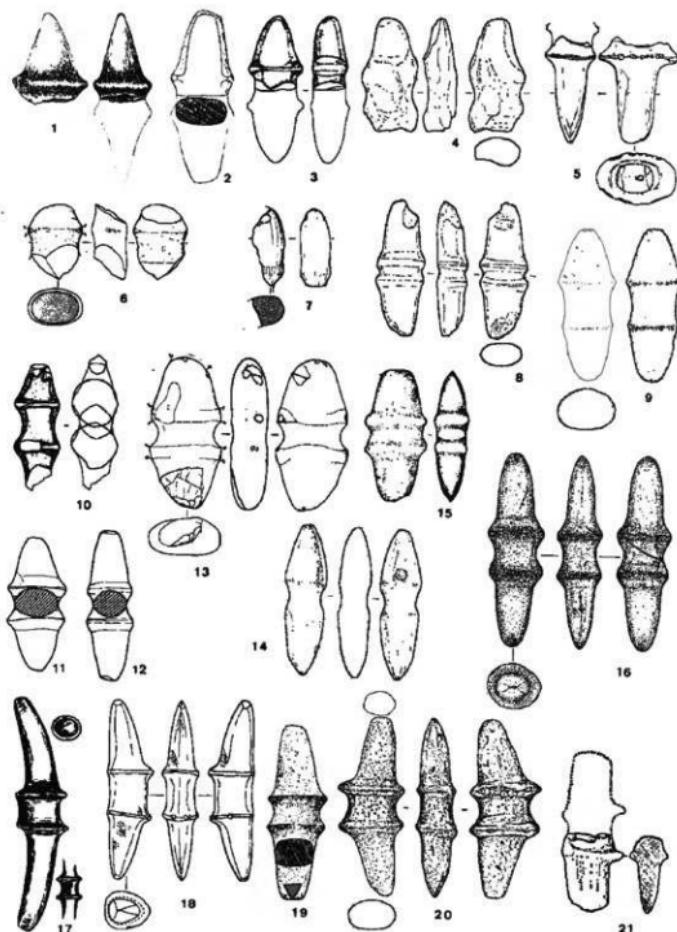
出土の独鉛石は、本例と我孫子市下ヶ戸・宮前貝塚の安行式期の住居址から2例出土しており、所属時期を明らかにするだけでなく機能や役割を考えて行く上で貴重な出土例である。12は全面に研磨が行われ両端部に打痕が見られる。14は袖ヶ浦町山野貝塚出土で凝灰岩製である（野村他 1975）。両端部に打痕が見られる。15は富津市富士見台遺跡出土で両端部が良く研磨され打痕も認められている（相田他 1972）。16は本稿で紹介した資料である。17は香取郡栗原町岩部出土で坪井正五郎氏が報告した資料である（坪井 1910）。18は八日市場市大堀遺跡から耕作中に発見されたもので、石材は斑岩である。整形は丁寧な研磨を全面に行い、一部斜方向の研磨痕が見られる。両先端部はかなり鋭く研ぎ出され、中央括部の縁に2条の帯状隆起がめぐる（小澤 1985）。19・20は加曾利貝塚出土で、19は甲野 勇氏が紹介した資料である。詳細は不明であるが、「全長 18 厘、體部断面は鼓形、両端刃状を為す。石質不明。全體表面に磨削されたる優品。」（甲野 1931）と記載している。20は石英閃緑岩製で整形は研磨である（杉原他 1968）。特に打痕は見られない。21は成田市荒海貝塚出土で（西村他 1965・西村 1975）、県下の出土例中唯一の独鉛状土製品である。中央括部から破損している。

次に、これ等を破損の仕方（破損型）と打痕の有無及び材質によって分類を試みると以下のようになろう。

- a類・中央括部で2つに折れたように破損しているもの（第4図-1～3・5・21）。
- b類・大部分欠損し破片の一部となっているもの（第4図-6・7）。
- c類・両端部や一方の端部が大きく破損しているもの（第4図-4・10）。
- d類・両先端部や一方の先端部に明瞭な打痕が認められるもの（第4図-2・8～15）。
- e類・完形で整形が敲打により先端部に打痕が認められないもの（第4図-16）。
- f類・完形で整形が研磨により先端部に打痕が認められないもの（第4図-17～20）。
- f類・土製品であるもの（図4-21）。

4まとめと今後の課題

今回、独鉛石の機能・役割に関して破損の仕方と敲打の有無などからa～fまで7分類することができた。そして、d類に何らかの実用利器の要素が見られるもののe₁・e₂・f類に非実用的要素が見られた。従来、独鉛石は完形品が多いと言られてきたが、破損の大小を別にすれば何らかの破損を受けているの方が完形品より多い。また、石材に斑岩や輝緑岩など硬度の高い塩基性の火成岩（新井 1984）を用いているものがある。この様な石材は堆積岩に比べ加工に労力がかかり、また簡単に割れないという特性がある。よって、a～c類は意識的に打ち割られた可能性が高い。道具の機能を考える上で付着物も重要な要素である。秋田県五十丁遺跡、鎌田遺跡、山形県釜淵遺跡から中央括部にアスファルトの付着した独鉛石が発見されている（安孫子 1982）。これは、アスファルトの膠着性からみて具体的に柄の装着が考えられよう。また成田市殿台遺跡出土の資料に1例敲打の凹中にかろうじて確認できる程の丹塗の痕跡が認められ、非日常的な非実用利器である要素がうかがわれる。f類とした独鉛状土製



第3図 千葉県下出土の主な独鉢石(1~20)と独鉢状土製品(21)

- 1.千葉市平山町
- 2.印西町天神台貝塚
- 3.10.成田市殿台
- 4.8.千葉市椎名崎遺跡
- 5.6.7.13.市原市西広貝塚
- 9.佐倉市吉見台遺跡
- 11.12.千葉市築地台貝塚
- 14.袖ヶ浦町山野貝塚
- 15.富津市富士見台遺跡
- 16.千葉市北原遺跡
- 17.栗源町岩部
- 18.八日市場市大郷遺跡
- 19.20.千葉市加曾利貝塚
- 21.成田市荒海貝塚

品は、他に長野県冰遺跡（永峰 1957）や奈良県権原遺跡（末永 1977）にも見られる。独鉛石の最も古い確実な所属時期は後期末葉安行式期であり、安行Ⅱ～Ⅲ式期にわたり多く出土し、晩期中葉から後葉にかけ土器製品が製作される。この様な「独鉛石」→「独鉛状土器製品」の出現は、「石冠」→「石冠形土器製品」の出現と似ており、今後両者の関連性にも注意をはらって行きたい。

独鉛石の機能は、一部に実用器の要素がうかがえるものの全体的には非日常的な非実用器であろう。このことは、主に1遺跡から1～2点の出土であるという出土頻度の低さにもうかがわれる。おそらく、独鉛石はかって日常的な実用器であった石斧類の代用として後期末葉に採集経済社会末期にわたる儀礼用の儀器として製作されたもので、晩期に更に儀式化が進行し完全に実用性を喪失した典型として独鉛状土器製品が製作されたのであろう。そして、弥生時代になると福島県宮崎遺跡例（周東他 1977）のように丹を塗り両端部を打ち割って再葬墓にわたる祭祀遺物として昇化してしまうものと考える。なお、今回は充分な考察ができなかった。より詳しい考察は次回に譲りたい。

最後に、本稿をまとめる際に際し特に石材の鑑定を引き受けくださった埼玉大学教授・新井重三先生をはじめ、武田宗久、金子浩昌、藤下昌信、栗本佳弘、庄司克、須田勉、米田耕之助、堀越正行、岡村道雄、折原繁、福間元、石田守一、寺内博之、那須正義、村石真澄、大津誠司の各氏にお世話をになった。記して感謝御礼申し上げる次第である。

（千葉市立加曾利貝塚博物館）

（参考文献）

- 安藤千鶴二 1980 「アスファルト」「織文化の研究」6 社会・文化
新井重三 1984 「加曾利貝塚より出土した石器用石について」「縄文時代の石器—その材料の変遷に関する研究—」下巻市立加曾利貝塚博物館
大庭宣介 1985 「獨鉛石の式別分類について」人間学講座 第24巻第2号
小林徳治 1985 「千葉県八日市場市大塚町出土の獨鉛石と其の獨鉛石の鑑定・復元をめぐって」— 追考者小論 第14集
折原繁 1987 「下巻市立加曾利貝塚—平山と後平山遺跡文化財センター」
企画委員会 1987 「印旛沼・茅原沼・沼田沼地域埋蔵文化財調査(本編)」下巻市教育委員会
栗本佳弘 1987 「千葉県加曾利—マーキング—」— 独鉛石遺跡—「下巻文化財センター」
早野義 1987 「独鉛石資料」古文化 第12卷第3号
佐白小林登志也 1988 「名古屋市埋蔵文化財博物館」
西村一郎他 1989 「岩出山遺跡調査」福島県大河原町岩出山遺跡委員会
木村雅也 1990 「下巻市立加曾利貝塚」帝京大学考古学研究所
杉原信介他 1990 「下巻市立加曾利貝塚—加曾利貝塚遺跡研究—」下巻市立加曾利貝塚博物館
猪谷敏樹 1991 「千葉県加曾利貝塚の見合遺跡の調査」考古学研究 第35回第3号
石川正典 1992 「丹波台遺跡出土の獨鉛石」考古学研究 第36回第3号
河野正典 1994 「瓦上丸瓦(?)」人間学講座 第25巻第2号
永野史一 1998 「独鉛石の調査とその研究」石器時代 第9号
内村正義 1998 「縄文に付ける独鉛石の利用」刊行記念 第17集第2号
内村正義 1999 「千葉県先史時代(第1次調査)」学術研究 第34号
野村幸彦 1999 「下巻市立加曾利貝塚」茅原沼地区
東日本新聞 1999 「近畿の高麗北陸線沿岸古墳群(紀伊・飛鳥古墳群)」近畿の高麗北陸線古墳群
「乙矢吉 1999 「獨鉛石」人間学講座 第26巻第2号
内南道教育委員会 1999 「千葉県内南道市埋蔵文化財分布地図」
那須正義 1999 「獨鉛石製品大系」古代 第71号
原田 1999 「多面切削状石器の系統の判明」山川 第103号